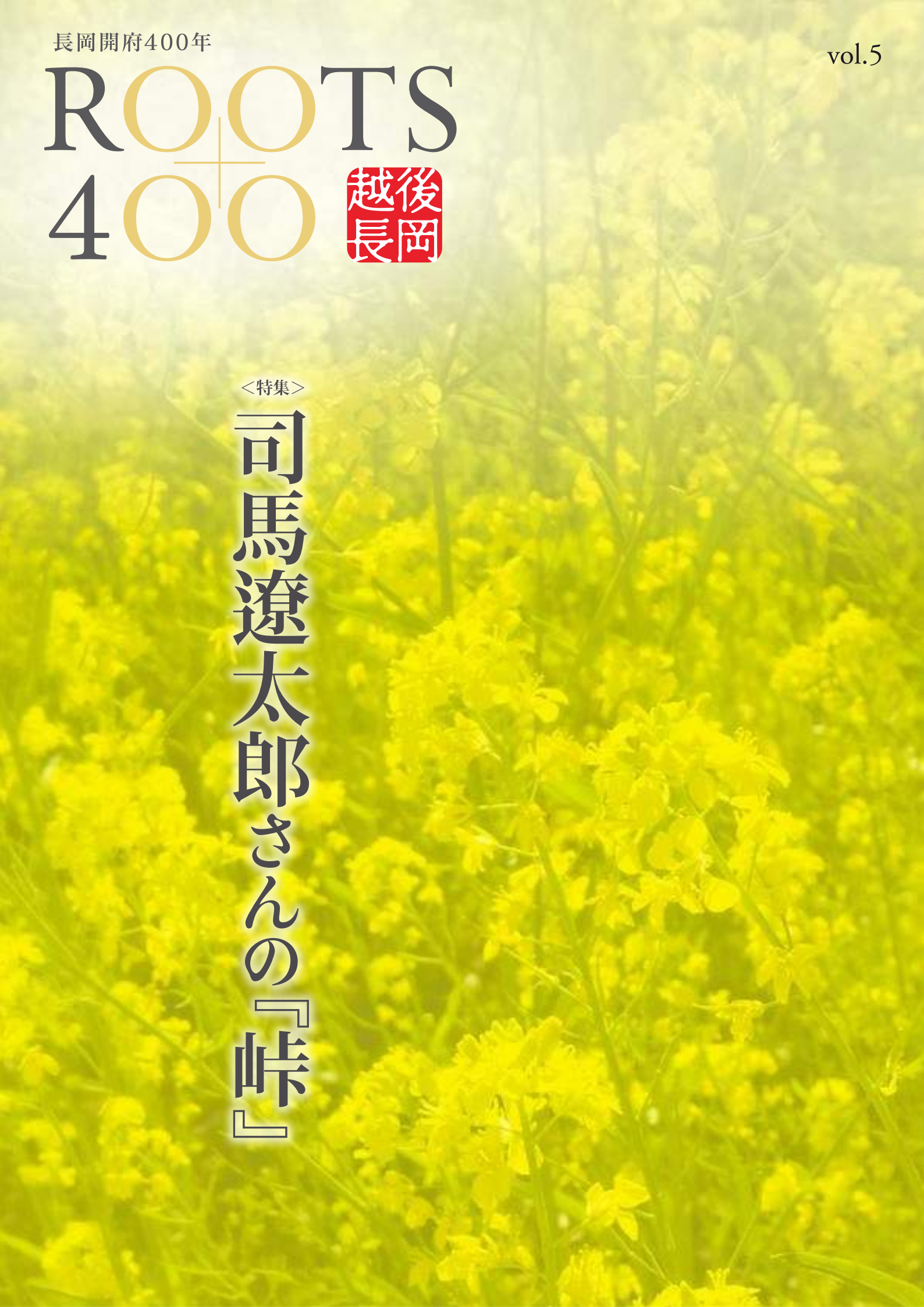
長岡開府400年

ROOTS 400

vol.5

越後長岡



＜特集＞

司馬遼太郎さんの『峠』

北越戊辰戦争と河井継之助

巻頭言

作家司馬遼太郎さん（そう呼ばせてもらいます）は
いまから四十九年前に
私たち長岡に大きな遺産を贈ってくれた。
幕末長岡藩の改革者・河井継之助を
主人公にした作品『峠』である。
以来、市民には河井継之助を見つめ直そうという動きもでて
市制百年を記念して
十年前に河井継之助記念館ができた。
私は、そのとき担当部長で
東大阪市の司馬遼太郎記念館に
司馬遼太郎さんのコーナーの設置を依頼に行った思い出がある。
そこで、知った事実は
司馬さんの思いとは違った、ほかの驚愕すべきものだった。
以来、そのことを伝えようと思っていたが
開府四百年を迎えようとしているこの機会に
皆様に知らせたいと思う。

長岡開府四百年記念事業実行委員会　会長　磯田 達伸

ROOTS 400 越後長岡

発刊趣旨
英語の ROOTS（ルーツ）は、樹木の根や物事の始まりを意味します。
また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、
開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。

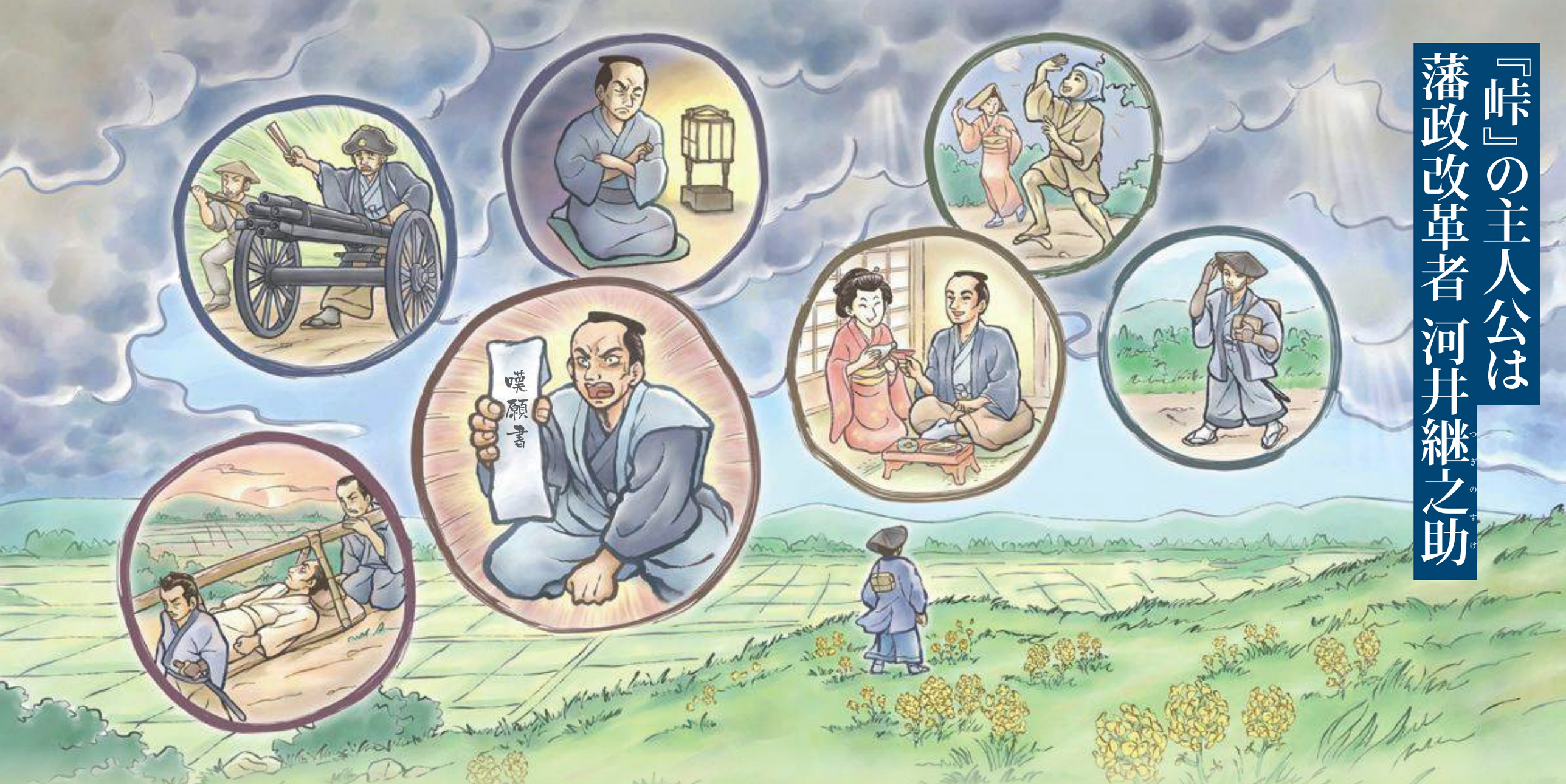
（左）武田勇将血戦図（慶応三年）　（右）川中島大合戦之図（慶応二年）
一魁斎芳年（いっかいさいよしとし）画　錦絵
本図は上杉謙信と武田信玄が戦った川中島合戦を錦絵に描いたものである。「川中島の戦い」を描いているが、幕末の争乱「禁門の変」「長州征伐」の戦いを川中島合戦になぞらえて描かれた錦絵である。いずれも歴史物を得意とした一魁斎芳年の教養の高さがうかがえる。両図にわたって、火箭（かせん）が貫いているのが斬新な構図である。
芳年は天保10年に吉岡金三郎の二男として生まれた。みずから月岡を画姓とした。十二歳のときに歌川国芳の門にはいり、芳年と号した。歴史上の人物を描くことを得意としたが、一方美人画にも役者絵にも腕をふるった。

司馬遼太郎さんは「峠」を執筆するにあたって、たびたび長岡をおとずれている。
昭和四十七年九月のエッセイ『司馬遼太郎が考えたこと』のなかの『峠』のあれこれで「長岡藩の武家言葉をなるべく採集して廻ったんですよ」と述懐している。
「そうこうして、長岡に何度か行っているうちに、たまたまモスリン問屋のご隠居のお婆さんに会いましてね。そこで、従僕松蔵の話から、河井継之助の最期を聴いて感動している。
「そこから、松蔵さんを通して、河井継之助の姿がだんだんに浮かびあがって見えるようになってきたんです」

写真提供・司馬遼太郎記念財団

司馬遼太郎（1923～1996）
大阪市生まれ。
大阪外国語学校蒙古（もうこ）語部（のち大阪外大、現大阪大学外国語学部）卒。昭和23年（1948）、産業経済新聞社入社。（36年退社）35年の『梟（ふくろう）の城』で第42回直木賞を受賞。小説作品には、『竜馬がゆく』『燃えよ剣』『国盗（くにと）り物語』『峠』『坂の上の雲』『空海（くうかい）の風景』『翔（と）ぶが如く』『菜の花の沖』『韃靼疾風録（だったんしっぷうろく）』など多数。『街道をゆく』『風塵抄（ふうじんしょう）』『この国のかたち』などの紀行、エッセイも多い。平成5年（1993）、文化勲章。
命日の2月12日は「菜の花忌」とよばれる。

『峠』の主人公は藩政改革者 河井継之助



司馬さんは昭和四十年（一九六五）八月六日午後五時三十分着の急行で、長岡をおとずれている。この日は台風十五号の影響によるフェーン現象で、蒸しあつかった。

出迎えた長岡の郷土史家の今泉省三さんと、新潟日報社長岡支局の記者。同行者は雑誌社編集部員が五名ほど付添っていた。

当時、司馬遼太郎さんは直木賞作家（昭和三十五年）として作家人気は鰻のぼりで、昭和三十九年に河井継之助を主人公にした『英雄児』の短編小説を発表したばかりの頃でもあった。

夕食を兼ねた打ち合せで「継之助の人物に興味を引き、なんとかして、ある程度のものをまとめあげたいといい、継之助の偉さを褒めた」とある。新聞長編小説『峠』の萌芽であったろう。しかし、そのときはほぼ調査をし終わっていたのではないだろうか。

翌八月七日は司馬さんの誕生日だった。記念日にこだわらない司馬さんの性格だが、四十二歳の誕生日を迎えるにあたって、河井継之助が没した年齢を重ね合わせながら構想を練っていたのだろうか。

『英雄児』を執筆して以来、長岡藩の家老河井継之助を奇妙な男だと常々思っていたらしい。翌日は小千谷市の慈眼寺や、榎峠を見学して帰っている。

『峠』のこと

越後長岡藩士河井継之助の生涯をたどった傑作。雪深い越後から江戸へ。そして西国遊歴の旅にでて、ものごとの原理を探り独特の世界観を持つにいたる物語。継之助は幕末の風雲のなかで、越後の小藩の独立と富国強兵をめざすが、その中立構想が運命のいたずらで北越戊辰戦争となってしまう。武士とは何か。陽明学とは何かを実践躬行した壮漢。果たして、その人生は今日的課題である地方創生を改革で実現させたが、という悲劇で終わるが、後世にその思考や精神性が大きな影響を与えた。司馬作品のなかで「日本人とは何か」につながってゆく作品のひとつ。

昭和四十二年（一九六六）十一月から四十三年五月まで、毎日新聞に連載された。新潮社刊の新潮文庫に同名の新装版（上・中・下巻）などがある。

『峠』の面白さはきわどい中立論にある

運命の小千谷談判

『峠』のなかで司馬さんは、小千谷談判を「峠」だといっている。「継之助の外交を一個の峠とすれば、談判というのは峠の頂上であろう。頂上への登りぐあいは、継之助が構想しぬいたとおりの形態ですすんでいる。前後を銃剣の林にかこまれてゆく、このきわどさはさることながら」と、さながら峠の道を歩いているようだと説明している。

「白刃の上を素足でわたるようなきわどさだが、このぶんではあるいは渡りきれるかもしれない」という継之助の思惑は「日本の内乱に対し、それを終熄させるところまで」いくことができるのではないかという希望を持つに至ったのである。

幕末の内乱（一八六八）「戊辰戦争」での中立の構想

『峠』には、司馬さんの新見解ともいうべきテーマが織り込まれている。まず主人公の長岡藩の家老河井継之助の中立主義である。次は陽明学がかもす全編に漂う人間臭さが河井継之助像を魅力的に描き出している。

もうひとつは、長岡藩の武士とは何者かだ。それはいわゆるのちに司馬史観となり、日本人とは何かにつながってゆく。まず、中立主義だが、長岡藩をスイスのような独立中立国にしようとする河井継之助の構想。

斬新な世界史観だ。

『峠』に今町の戦いのあと、刈谷田川の橋のたもとで老人が孫の遺体を洗うシーンがある。おそらく流れ弾で、孫は死んだのかもしれない。子どもたちは戦場で鉛玉を拾い、それを東西両軍の陣地に持っていったというから、その際の犠牲となったのであろう。

「おれが家老になったのは、こういうつもりではなかった」と継之助は頭を下げたとあるが、そうした継之助の本音は非戦を説いていたという司馬さんの主張に符合する。

そこに司馬さんの河井継之助の独立中立論の原点がある。

大勢になびかぬ独立

「風雲のなかに独立すべし」

司馬さんは執筆中に、河井継之助の生き方を探るうちに、そう思ったに違いない。幕末の諸藩の指導者たちが、日和見主義となり、動乱の嵐のなかでなびいている史実をみて、北越の小藩の長岡藩だけが独立したことに注目した。

新町杭違之図（『長岡懐旧雑誌』）
のちに戦争の際、河井継之助が負傷した三国街道上の要衝

継之助が筆頭家老稲垣平助に

「いずれが勝つ、いずれが負けるということより、べつの原則を今夜はたてねばなりませぬ。いかに世がみだれ、藩が悲境に立とうとも、ゆらがざる原則というものをうちたて、それに添って全藩が動かねばなりませぬ」と封建の世の道義が培ってきた、武士の正義を説いた。

河井継之助が戦国武将の上杉謙信を尊敬していたことに例をとり、大坂夏の陣で「開戦直前、主将上杉景勝は全員を草の上に折り敷かせ、敵城に目をこらさせている。これが謙信以来の上杉の軍法であった」「不動と沈黙のなかに凄気をたくわえさせるのである」

他将の応援依頼などを無視し、直前の敵を凝視する謙信公以来の越後の兵が、幕末風雲時の長岡藩兵であった。

継之助はよく、独立特行を説いたというが、司馬さんは「それによって天下に何が正義であるか知らしめ」「天下の耳目をひきつけ、人心を吸収し」「こんにちの混乱を正道にもどす」と意義づけてくれたのである。

「独立の気象は緊張からうまれるものだ」とし「この男の勇気は尋常でない」と讃えた人間の歴史の筋目を教えてくれた作家だ。

語り継ぐ先人の想念

『峠』のなかで、司馬さんが談判の会場になった小千谷市の真言宗寺院、船岡山慈眼寺をたずねたことが記述されている。昭和三十九年（一九六四）の夏だと明記し、慈眼寺までの道筋を聴くためにたまたま居合わせた老人に道をたずねている。

「慈眼寺はどこですか、ときくと、だまってうなずいてついてきてくれた。

長岡から継之助がやってきたというのも、こういう暑い日だったらしい。と老人は突如いった。

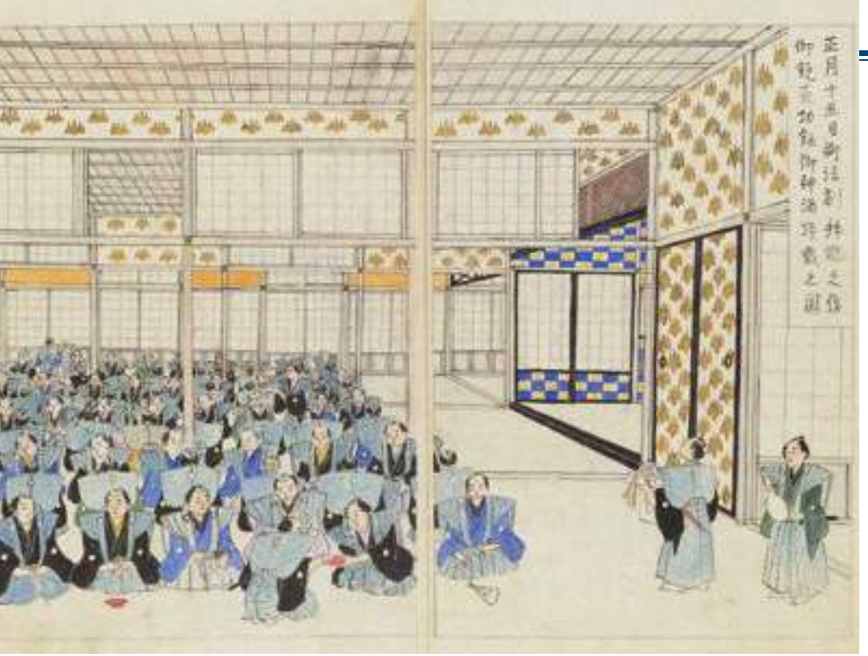
西軍はね。

長岡の継之助のいうことをあたまからきかなかった」「長岡の継之助はね」「悲しかっただろう」と司馬さんは『峠』に書いている。

その小千谷談判は慶応四年（一八六八）五月二日の午後の二時頃、慈眼寺で行われた。

対するは西軍軍監岩村精一郎（土佐藩士）それに薩摩藩の淵辺直右衛門に長州の杉山荘一郎と白井小助だ。

河井継之助につき添ってきた長岡藩士の二見虎三郎は次室に控えていたという。結局、話し合いにはならず、はなから岩村らは河井継之助の言い分を聞こうとしなかった。



正月15日御法制拝聴之図（『長岡懐旧雑誌』）
長岡藩は年1回、本丸御殿において、長岡武士の行うべき法制倫理を拝聴し、神酒をとりかわした。

「会津征伐に長岡藩が赴かないなら、いまここから戦場だ」というのである。嘆願書を提出し、総督府に取り次いで欲しいと言っても聞くような相手ではなかった。

河井継之助の中立主義は無となった。

「継之助はおもう。いま、この大変動期にあたり、人間なる者がことごとく薩長の勝利者におもねり、打算に走り、あらそって新時代の側につき、旧恩をわすれ、男子の道をわすれ、言うべきことを言わなかったならば、後世はどうなるのであろう」

そう考えた継之助は翌日、長岡藩領前島村で、開戦を決意した。

後世、長岡市民は「長岡城の歌」を愛唱した。

その歌詞に「西軍、きかず我が願い。無念やるなし継之助」とある。

史論に根拠

司馬さんは河井継之助の「越後長岡藩がスイスのような中立主義をとろうとした」と『峠』で述べている。戊辰戦争が始まっているさなかに中立など許されるものかと河井継之助の地元長岡でも渦巻いたものだ。

ところが、その中立主義には司馬さんが、ヒントにした図書があった。長岡の郷土史家今泉省三の著書『三島億二郎傳』である。

「吾々長岡藩は、擾々の間に独立して、忠義を全うし、民を治め、天日光明の時を待たんと期せし」と河井継之助の言葉を載せている。ときは小千谷談判の翌日。慶応四年（一八六八）五月三日の午後。場所は信濃川河畔の長岡藩領前島村での出来事であった。

川は折りからの洪水で怒涛のように流れ狂い、その渦中を侵して河舟で渡ってきた河井継之助が、親友川島億次郎（のちの三島億二郎）に語った言葉を、郷土史家の今泉省三さんは、再現していたのだ。今泉さんは、司馬さんを長岡で案内した唯一の歴史家である。その著書を、司馬さんは参考にしていたのだ。

また、『河井継之助傳』からは会津藩士秋月悌次郎がのちに証言した江戸の大槌屋での河井継之助の発言を、『峠』で紹介している。「シカラバ則チワガ藩独リ封疆ヲ守ルノミ」と原文を使い、発表したところが、斬新だった。

この見解に、長岡ではビックリしたものである。

司馬さんの史論には、必ず根拠がある一例である。

歴史の矛盾に向き合う

「継之助はあくまでも中立が存在しうると信じていた。その中立をまもるために新鋭武器を買い入れ、藩軍を洋式化し」「日本国でただ一つの例外を、継之助はその全能力をかたむけて、つくりあげるつもりであった」

一つの外交上の威力が中立主義を樹立できると信じていたのである。それは作家司馬さんが河井継之助の立場になって導き出した中立主義の真義というものであった。

「戦さはしてはならんでや」と日頃から戦争回避を模索していた長岡藩家老上席の河井継之助が、小千谷談判を経て開戦に踏み切るには、いかなる苦悩があったのであろうか。

現代に生かせる

『峠』のなかの司馬さんの言葉

一　おれの女房などは可哀そうなものだ。

「この男（継之助）は江戸の寄留さきで、面持を悵然とさせながらいったことがある」と『峠』にある。

『河井継之助傳』では「山一つ、河一つ越えれば江戸さ」と妻のすがを安心させて旅立つ継之助を紹介しているが、司馬さんは悵然（恨みなげくさま）としたところに、この奇人の夫婦の悲喜交々の関係をあらわしているところが面白い。

『長岡懐旧雑誌』の「北越戊辰戦争図」

二　人間、虚飾などは屁のようなものだ。

江戸の吉原の稲本楼で、遊女の小稲と初会の際、田舎者の継之助が言った言葉。虚飾で成り立つ遊びの世界で、堂々と本音でつき合おうとする継之助の度量の太さを司馬さんが、辛辣に紹介している。

三　人間は互いに肥料であるにすぎぬ。肥料に惚れてしまってはどうにもならぬ。

備中松山藩の陽明学者で改革者の山田方谷に、継之助は惚れこんでしまった。元来、狷介な性格の継之助が、敬服した学者の肥料（改革論など）に惚れ込んだという表現が当然、改革は農事改革だということを暗示させている。

四　人間は立場で生きている。

人はそれぞれの環境や育った歴史風土で生きている。継之助が長州藩の勤皇志士の吉田稔麿と富士山を眺めることのできる箱根で出会ったときに発した言葉。出身の藩の歴史の違いを、表現した。

「立場など、皇国存亡のときに私情じゃありませんか」と稔麿が言うと「うろたえるな」と継之助はいおうとしたが、だまったとある。

五　「理にあわぬ禁令が出ると、ずるいやつが得をする。政治が社会を毒するのはそういう場合だ」と書いてある、と良運さんはいうのである。

良運とは百石取りの藩医で同年代の親友。

「中国（宋）の宰相李忠定公集から、継之助に良政の要締を教えようとすると『なんの』継サはいった。

『おれ自身が踏みこんででも、やるとなれば根絶やしにしてしまう』（この男ならやりかねない）良運さんはおもった」

とある。改革は私情を越えてもやりきる継之助の性根を著している。

河井継之助（1827〜1868）

風土を活かす

物語に生きる風土

方言がでてくる。

代表的な例では「おみしゃん」（おまえさん）である。越後長岡藩士の多くは、三河国牛久保（愛知県豊川市牛久保）の出身だ。その領袖ともいうべき牧野氏は、家臣とともに徳川家康の関東移封に伴い、上州大胡（群馬県前橋市大胡）に移り、江戸初期に越後長峰を経て、元和四年（一六一八）に越後長岡城に入った。

以来、越後にあっても、かたくなに三河時代の風儀を守った。気風は「常在戦場」であり、行儀は「侍の一分を立てよ」であった。

主君を領民は殿様と呼ぶが、家中では「殿サン」である。

「おまえさん」を越後では「おめさん」だが、長岡藩中では「おみしゃん」だ。継之助は相手を呼ぶときは誰かれなく「おみしゃん」を使っている。

『峠』では司馬さんは、「そうしてください」を越後から江戸へでてきた風呂焚きが「そうしてくらっしゃえ」と言ったとある。

そうすると武士は三河言葉で「そうしてくりゃえ」と言ったと司馬さんは紹介している。

同じ地域（長岡城下）で二種類（越後弁と三河弁）が使われていたことを作家はよく理解していた。そういう地域性を司馬さんは怖れずに文中に使用している。

水島爾保布画『昔の長岡十二か月』「悠久山の花見」

河井継之助の人がら

『峠』の主人公の河井継之助が、江戸の古賀謹一郎の塾に入り、書庫からみつけ出してきた「李忠定公集」を書き写す。

「一劃々々、気根をこめ、一字をまるで、あぶら汗を垂らすようにして書いてゆく」

継之助は若いころから、良書を見つけるとまる写しにする勉強法をよくやった。その際、文意の真理を吸いとるかのように楷書で書き写したという。素読、注釈が中心だった江戸末期の勉強方法に、あえて写し取る自習方法をとり入れた継之助の人間性を表現している。今日から見ればあたりまえのことかもしれないが、学問を学ぶことの根本をかえたことかもしれない。

「学問などは、ゆらい、人から教えられるものではない。自分の好きな部分を、自分でやるものだ」と主人公（継之助）にいわせるところがうまい。

千咲く桜、なる実はひとつ

『峠』に長岡甚句が数多く登場する。

歌詞は多様だが、江戸時代から伝わる代表的なものに

「お山の千本桜、花は千咲く、なる実はひとつ」

「お前だか、左近の土手で、背中ぼんこにして豆の草取りやる」

「盆だてがんね茄子の皮の雑炊だ。余りてっこ盛で、鼻のてっぺん焼いた」

「デンデラデンとでっこい、かか持てば、二百十日の風よけに」

などの剽軽な歌詞に、辛辣な庶民の抵抗歌が織りこんだものが多い。河井継之助は妹の長襦袢（浴衣と『峠』にあるが）をつんつるてんに着てさむらいまげの頭をほうかむりをして、こっそりと盆踊りにでかけたことが記されている。

余程、継之助は盆踊りが好きだった。

それに盆踊りが、長岡城を取戻した日に、

「城の大手通には、町民がむらがり出ており、酒樽が山のように積まれ、なかには長岡兵と町民とが抱きあいながら長岡甚句を唄い、輪を組んでおどる」ことが記されている。

陽明学の思想

眼と心を一つに、志をもて

「十七天ニ誓ッテ　輔国に擬ス」とは河井継之助が「周礼」によって、十七歳のとき志を立てた故事に基づいている。河井継之助がいつどのようにして陽明学に触れたかはわからないところが多いが、司馬さんは『峠』で陽明学の本義を多用している。

「この思想にあっては、つねに自分の主題を燃やしつづけていなければならない。この人間の世で、自分のいのちをどう使用するか。それを考える」ことが陽明学の思考だと説明している。

「人間の目と心があればこそ、天地万物が存在するというのである。つまり天地万物は主観的存在であるという。いわば唯心的認識論といっていい」

ともいっている。

—心は万人共同であり、万人一つである—

というのが継之助のいう王陽明の学説であったと司馬さんは陽明学を表現した。そういえば、河井継之助のエピソードに

「心と眼と手とさへ一致すれば、決して傷などつけることがない。何事も此の秘伝を忘れてはならぬ」というのがある。武士は毎日のように月代を剃った。まげを結い、頭をこしらえてこそ武士となるものだが、妹の安子が十二歳のとき、兄の継之助の月代を剃ることを手伝ったことがあった。要領は眼と心を一つにして剃るものだと教えたのである。

陽明学には、己れを生かし、他を生かすという独特な教えがある。ペリー艦隊が浦賀沖にあらわれ、日本の国難が迫った際、「眼を開け、耳を開かなければ、何事も行はれぬ」といい、今までとは違った価値観を実際に確かめてみようとしている。

そういう陽明学の思想が『峠』の主要の骨格を為している。

十七歳のとき、志を立てた継之助を司馬さんは「男子が男子たるゆえんは志の有無にある」という。

「礼楽」は四子六経の一経だが、司馬さんは『峠』で「礼楽」の貴さを説いた。礼節と音楽を礼楽というが、現代でいう「文化」につながるものだ。

その文化の水準の高さが、志の貴さにつながるとしたら、人の世の文明の色艶を問うことになろう。

『長岡懐旧雑誌』から「藩主家族の住まい」（長岡城内殿町の図）

武士のプライド

最後のサムライの気概

サムライとは何ものなのか

武士の身の処し方にこだわった一節が『峠』にある。「つねにその場で死にうる覚悟を養っているべきだというのが継之助の日常の思想であった」というのである。それは徳川三百年という長い歳月に育てられた精神の美徳というものであったという。

長岡藩の家老河井継之助は一介の長岡藩士から、牧野家中の家老上席にまで昇りつめるが、司馬さんは『峠』で「人間は立場で生きている」と著した。

立場とは何だろう。つきつめていえば侍の立場である。継之助が家老の牧野市右衛門（別名・頼母）に責任を問われると、「長岡藩の現在と未来をのみ考えてゆけばよい。人は立場によって生き、立場によって死ぬ。それしかない」と侍の覚悟を述べている。

事実、河井継之助の人生はその通りとなった。

立場を恨まぬ 立場を活かす

人の世の「出処進退」について『峠』では触れている。今泉鐸次郎著の『河井継之助傳』では

「人と云ふものの世に居るには、出処進退の四つが大切なものでござります。そのなかの進むと出づると云ふことは、是非、上の人の助けを要さなければならぬが、処ると退く方は、是は人の力を藉らずに自分ですべきもの」とある。人事の要諦のように思われがちだが、継之助は元来、この出処についてつぎのようにもいっている。

「人の世に処すると云ふものは、苦しい事も嬉しい事も、色々あるものだ。その苦しい事と云ふものに堪へなければ、忠孝だの、節義だの、国家の経綸だのと云うた処が、到底、成し遂げられるものでない。この、苦しい事を堪へると云ふことは、平生から錬磨をして置かなければ、その場合に限って出来るものでない」

人は心がくじけそうになることが多いものだが、そのときこそ、絶妙な機会がおとずれたと自覚することも面白いことだと思う。その修めた学問を生かす機会だとを捉えて、進むことが大切だと教えてくれた。

作品『峠』の再考

石高七万四千余石の城下町に一人の壮漢があらわれて、改革もし戦争もし、人びとを喜ばせてもし、また苦しめてもいる。

河井継之助は戊辰戦争で一度、落城した長岡藩を奪還している。勿論、六百九十余名の長岡藩兵とともにである。八町沼を夜間、渡って、落城から二か月後にとり戻した。その際、城下を焼土にして二度と西軍の進駐を許さないようにした。ところが、戦後そのことのみが悪評となってしまった。

河井継之助は、『峠』が発表されるまで、「町を戦争で焼いた男」などとレッテルをはられていた。

そんな継之助を地元では薩長に挑んだ男だなどと、自慢半分、憎しみ半分といった評価もあった。

その評価を一変させた作品が明治維新・戊辰戦争百年を機に生まれている。それが司馬遼太郎さんの幕末史『峠』である。

それから、やがて五十年がたとうとして、いま長岡は開府四百年と戊辰戦争百五十年を迎える。

このあたりで司馬遼太郎さんの『峠』から河井継之助の精神性を再考する機会がおとずれたといって過言ではない。

水島爾保布画『昔の長岡十二か月』の「盂蘭盆御家中踊」の図。河井継之助は盆踊りが好きで踊りの輪に入り、長岡甚句を歌った。

司馬さんのやさしさ

昭和四十六年（一九七一）九月二十二日、新潟県長岡市の厚生会館で長岡高校創立百周年記念行事の一般市民対象講演会が開催され、司馬遼太郎さんは、「歴史と人生」（講演録では『河井継之助を生んだ長岡』）という演題で講演をしている。約二千人の聴衆を前に語っている。

「分の厚さを守った人は悲劇的な生涯をたどる。河井継之助の場合は、長岡そのものを悲劇的な集団にしてしまった。しかし、そんな目に遭いながらも、長岡の人は継之助を大事にしている。ですから、継之助ひとりだけではなく、長岡全体が大きいのです。長岡の存在というものが、日本の歴史を分厚くするうえで、非常に大きい役目を果たしてきた」と結んだ。

だが、執筆前の長岡取材の際、市民の河井継之助の不評判を聴き、心を痛めていた。執筆を終えた四年後に講演を引きうけて、喜んでかけてきたのである。

果たして、市民からは大歓迎をうけて、司馬さんは、みずからの確信が喜びに変わった。「長岡は素晴らしい町だ」と認識してくれたのである。

それは河井継之助を通じて、司馬さんが歴史小説家として、幕末思想史に新風を送ることのルーツとなった。昭和六十三年七月の福島県白河市の青年会議所主催の「敗者たちの戊辰戦争」と題した講演のなかにも、「長岡藩を率いていたのは、総督の河井継之助です。この人は、ひとつの民族の歴史のなかで、何人も出てこないほど、政治的感覚の鋭い人でした」と述べている。

平成五年三月の『週刊朝日』の『台湾紀行』に「徳川にも関係なく、薩摩・長州にも関係なく武装中立でいこうとした。しかし時代の暴力的な流れに押し流されてしまう。日本史の一大損失でした。この時代、河井継之助は新しい国家の青写真を持った唯一に近い（中略）人物だったのに歴史は彼を忘れてしまっている」と記している。

『峠』の執筆から、やがて地元の長岡の熱烈歓迎も醒めて、河井継之助の訓みかたも「つぐのすけ」に戻ってしまっていた。瑣末な事項を革命論で解説する歴史家もあらわれて、司馬さんの心を曇らせてしまった。

しかし、司馬さんは長岡人に流れる河井継之助への思慕の気持ちを汲みとっていた。河井がいなかったら町は焼かれなかったのだという感情のうらはらに、河井がいたからこそ、今の町があるという市民の潜在的な気持ちを読みとっていたのである。

十年前の長岡で河井継之助記念館設立の際、東大阪市の司馬さんの後継の「司馬遼太郎記念館」で生前の作家の意向を聞いたとき、あらためて、司馬遼太郎さんの日本歴史をみるやさしさを知った。

長岡市民になったお殿様 No.5

牧野家第十七代当主 牧野忠昌氏 寄稿

牧野家の歴史

愛知県豊川市の財賀寺は神亀年間に創建され、その後、豪族であった牧野氏が復興整備したと言われている。厨子の造立は古い壁板の墨書によると、文明十五年（一四八三）牧野左京亮守成、牧野修理進利業の二人である。本堂裏の八所社は財賀寺の鎮守であり、文明三年（一四七一）に牧野古白が建てたもの。当時は多くの牧野家家中や領民を戦いで失っている。寺社への祈願は亡くなった人達の御霊への供養であるとともに、平安の世と五穀豊穣を願う祈りであったと思う。

牛久保城址の近くに熊野神社がある。享禄元年（一五二八）の神社改築の棟札には牧野民部丞成勝の名が書かれている。牧野氏の尊崇が篤く、社前の石灯籠は九代牧野備前守忠精が寛政八年（一七九六）に寄進したものである。境内には忠精公お手植えの柏の老木があり、この柏の実生を蒼柴神社招魂社社殿横に数年前に植樹し現在も元気に育っている。

すくすく育つ柏の木（悠久山）

現代に生きる牧野ファミリー

長岡で峠道と言えば江戸に通じる三国街道と会津に向かう八十里越が有名だ。

愚息が小学生のころ家族で三国峠を歩いた。越後湯沢側から登り殿様の休憩所の清水で喉を潤し、峠を越えて、罪人を移送中雪崩にあって死亡した長岡藩士一行のお墓にお線香をあげてお参りした。峠道には昔の立派な石畳が残り、道脇には馬頭観音が並んでいた。峠の石碑にはかつてこの峠を越えた人達の名前が刻まれており、ご先祖の名を確認し改めてこをお通りになったのだと実感した。

一方、八十里越は知人数名と二度に分けて歩いた。JR大白川駅から山道に入り、一回目は田代平から福島県側の入叶津へ、二回目は新潟県側の吉ヶ平へ抜けた。どちらも厳しい山道であったが、ある程度の道幅が確保されている箇所もあった。北越戊辰戦争の時は長岡藩主一行、家臣団とその家族などが大変苦しい状況下でここを通過している。無事に八十里越を終えた後、先人の皆様のご冥福をお祈りした。

河井継之助記念館の紹介

司馬遼太郎コーナー

長岡市には、河井継之助の生家跡のまさにその場所に記念館がある。この地を訪れる『峠』の愛読者に向けて特筆すべき展示は、北越戊辰戦争の古戦場である榎峠を眺望する信濃川沿いに置かれた、文学碑裏面の原稿である。

平成五年の建立に合わせて書き下ろされた原稿には推敲の跡が多く、当地に向けられた作者自身の思いの丈が窺われる。ほとんどカラフルとまで云える色鉛筆の筆致も生々しい。愛読者にしてみれば、塗り潰された修正箇所から透けて見える内容に興味をそそられる。説明パネルは現司馬遼太郎記念館館長の上村洋行氏が選んでくれた。

「雪が来る。（中略）
継之助は町をあるいていた。（中略）
胸中、つぶやきの多い男だが、しかしその歩きざまはゆるゆるしたものではない。股立ちをとるように―とってはないが、―道路の中央をさっさと歩く。武士はりりしくあらねばならぬという気風が、この藩は他藩にもまして濃い。歩き方まで、しつけられている。たとえにわか雨がふってきても、軒端へにげこむのは町人で、藩士は逃げず、雪駄をふところにほうりこみ、道の中央をためらいもなく歩いてゆく」

今、よく眺めると『峠』のテーマが見えてくる。よき判断だった。

『峠』に「武士という人間像は、日本人がうみだした、多少奇形であるにしても、その結晶のみごとさにおいて、人間の芸術品とまでいえるように思える」とあるが、サムライの河井継之助が雨の中を大道の真ん中をのしのしと歩く姿に、長岡のサムライの原型があるのだと教えたかったのに違いない。

なお、『峠』本編の直筆原稿としては、新聞連載時の「越後の城下（十）」の節から、長岡で登楼した河井継之助が遊女の品定めをするくだりが展示されている。

河井継之助記念館2階「司馬遼太郎コーナー」

河井継之助記念館
開館時間／AM10:00～PM5:00
（最終受付 PM4:30）
休館日／年末年始
所在地／長岡市長町1-甲1675-1
電話／0258-30-1525
入館料／大人200円　高校・大学・障害者・介助者150円　小・中学生100円
（団体割引あり）

長岡開府四百年記念事業

次の百年へ 新しい米百俵

未来に向けた「まちづくり ひとづくり」

平成三十年の長岡開府四百年に向け、先般、長岡開府四百年記念事業実行委員会を開催しました。その後の調整を経て、基本方針を「郷土長岡の歴史や文化、まちづくりの精神を、次なる百年のまちづくり、ひとづくりに活かす」とし、キャッチフレーズを「次の百年へ 新しい米百俵」とすることに決定しました。

記念事業では、「歴史、文化、伝統に親しむ」「交流人口増・一体感醸成」「未来への投資」の三本柱のもとに、市民協働・官民連携で記念式典やプレイベント等の事業を、展開していきます。

次世代を担う子どもたちに新たな100年のバトンを手渡します

市内各地で長岡開府400年をPR

長岡開府400年記念事業へのご寄附をお願いします

当事業では、『未来への投資』を柱に、長岡ならではの「新しい米百俵」と呼べるような、未来志向の事業を実施し、これからの長岡を支える人材を育成してまいります。当事業の趣旨にご理解いただき、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

●ご寄附のお申し込み・お問い合わせは事務局
長岡市政策企画課
開府400年記念事業推進室
TEL.0258-39-2395へお願いします。

口座名義：長岡開府400年記念事業実行委員会
金融機関：北越銀行長岡市役所支店
口座番号：２０２７２６２

もうひとつの河井継之助記念館

只見 河井継之助記念館

慶応四年（一八六八）八月十六日河井継之助は福島県南会津郡只見町塩沢の村医矢沢宗益邸で没した。その家は、昭和三十七年（一九六二）の滝ダム建設で湖底に集落ごと沈んだ。ただ河井の終焉の間だけは、矢沢家と只見塩沢の人びとの力で大切に保管・移築され、現在、只見町の河井継之助記念館の館内で当時のままの姿を見ることが出来る。

昭和四十九年（一九七四）九月司馬遼太郎さんは、只見の河井継之助記念館の前に広がる只見川（滝湖）のほとりで、その景観に見入り思いを馳せた。

山水相應蒼龍窟

『峠』のなかの敗走路「八十里越」は、長編も得意の司馬さんにしては、ものさびしい。従者の外山脩造に「武士はもう、おれが死ねば最後よ」と継之助がいったと司馬さんは書き記した。

「日本人は美しく生きねばならぬ。死ねばならぬ」は、司馬さんの日本人の歴史をみるモチーフであろう。

『峠』の原稿で、始め「わしはおそらく死ぬ。わしが死ねば死骸は埋めるな。時をうつさず火にせよ」と書いた。しかし、「おそらく死ぬ」を「自分の始末をせねばならぬ」と書き改めている。

より深い日本人の諦観を、かくも見事に描き切る作家はいないだろう。そんな余薫が八十里越の風趣に漂っている。山紫水明の奥山に、司馬さんが夏草を踏む足音が聞こえてきそうである。

只見町河井継之助記念館
開館時間／AM10:00～PM4:30
（最終受付 PM4:00）
開館期間／4月下旬～11月中旬
休館日／毎週木曜日
所在地／福島県南会津郡只見町塩沢字上ノ台850-5
電話／0241-82-2870
入館料／大人300円
小・中学生150円
（団体割引 あり）

開府四百年のあゆみ No.5

いまから百二十六年前、河井継之助の碑が長岡城址に建立された

長岡開府三百年を機に悠久山公園へ

明治二十三年（一八九〇）八月、河井継之助の碑（河井碑）が建立された。篆額（てんがく）は黒田清隆、碑文は備中松山藩・山田方谷のもとでともに学んだ三島中洲（毅）である。

長岡藩は、北越戊辰戦争で新政府軍と開戦。戦後、その責を一身に負って、家老の山本帯刀（たてわき）家と河井家は家名断絶となった。明治十六年に両家の家名再興が許され、同二十一年、山本帯刀の碑が長岡城址に建立された。

河井碑建立の機運も明治二十二年の帝国憲法発布の際の大赦により徐々に高まり、翌年隣接地に建立された。時を経て巨石に刻まれた両人の事績は、二人の人物の記憶を人びとに甦らせた。

北越戊辰戦争から四十九年後の大正六年（一九一七）、長岡開府三百年祭が挙行された。主要事業の一つ、悠久山公園の整備にあわせて、河井碑は、長岡中学校の生徒たちの手で、現在地に移設された。

史跡公園の趣きを伝える悠久山。河井碑は、山本帯刀、小林虎三郎、三島億二郎らの幕末維新期に活躍した長岡人たちの石碑とともに、蒼柴の杜（もり）の一角を今に占めている。

「戊辰北越戦争記」に描かれた長岡藩藩士
後列右が河井継之助、後列左が山本帯刀
『戊辰北越戦争記　訂正再版』野口団一郎／編（1893年）
（株）大坂屋書店所蔵

お山の千本桜で、春を楽しむ人びと
（柏崎市立図書館 小竹コレクション絵葉書）

公園池畔の桜花
（柏崎市立図書館 小竹コレクション絵葉書）

長岡城址本丸跡の一角にあった御三階櫓跡の高台の上に建てられた山本帯刀碑（左）と河井継之助碑（右）写真は明治30年代
（株）大坂屋書店所蔵

現在の河井継之助の碑

千也（かずや）がゆく！

KAZUYA REPORTS

長岡藩ゆかりの地を巡る探訪記

第5回

大阪編

雪残る越後の峠を抜け
辿り着いた地「大阪」
菜の花が道を黄色一色に飾ってくれる。
目的地に案内してくれているように…

我が師匠稲川先生と記念館前でパシャり。
菜の花がお出迎えしてくれました。

八戸ノ里駅～記念館までの道に咲並んでいる菜の花。黄色一色の道は行くまでに心をワクワクさせる。

上村洋行館長と対談のひと時。
貴重な時間で色々なお話が聞けました。

圧巻の6万冊の蔵書の棚。
本棚にある本は司馬さんの書き残した著書や自宅にあった蔵書の品だそうです。

開館2001年から今も変わらずいる龍馬像。皆さんもご存知の代表作『竜馬がゆく』から龍馬さん飛び出して来館者をいつも見守っていてくれているかの様に浮き上がっています。

司馬遼太郎記念館
開館時間／AM10:00～PM5:00
休館日／毎週月曜日（祝日・振替休日の場合は翌日）、特別資料整理期間（9/1～10）、年末年始（12/28～1/4）
所在地／大阪府東大阪市下小阪3-11-18
電話／06-6726-3860
入館料／大人500円　高・中学生300円
小学生200円
（団体割引あり）

八戸ノ里駅を降りたら菜の花が道標となり、僕が龍馬を好きになったきっかけ『竜馬がゆく』など有名な著書を執筆している司馬遼太郎さん生誕の地に行ってきた。

記念館の門をくぐると花や草木が植えてあり、今も残る司馬さんの自宅の書斎を囲んでいる。広い庭園には日向ぼっこしている猫がお昼寝。奥には光のアーチを作るガラス屋根と影を映し出すコンクリートの記念館。中に入ると地下一階から地上二階までの吹き抜けの空間に壁びっしりの本は圧巻。地下に降りると東面にあるステンドガラス窓から差し込む光が館内全体を照らしてくれる。

天井を見上げればまさかの龍馬像がお出迎え。僕にとっては「ありがたやー」「今日はよろしくお願いします」ってご挨拶。

そんな司馬ワールドに魅了され二月に二度行きましたが、何度行っても本に囲まれる空間と庭園の居心地は好きだな。

司馬さんの本を全部読んだわけではないが『峠』『竜馬がゆく』を読んで僕の思考は変わった。小説というジャンルの中で本の主人公たちの在り方は、実際は数多くの本や資料を集め調べた司馬さんだが、その時代に生き描き収めたのではないかと思うほど本に夢中にさせる。これはまさしく小説ではなくリアルノンフィクションだ。

最後に司馬さんの言葉で「人間にとって、その人生は作品である」と残している。僕は本を読んで人生の道標になり人としての心得を学び心に火が点いた。日本人として時代に刻まれた歴史を学び人に伝える事を教わった。

「人として、人生の作品から学ぶ」だ。

執筆：石丸 千也（いしまる かずや）
長岡で美容室を経営し、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。

長岡藩筆頭家老 稲垣平助の娘

武士の娘

紙魚の声かな。

―父は裏切り者ではありません

長岡藩のために命を賭し信念を貫いたのです―

自伝小説『武士の娘』は、長岡藩筆頭家老・稲垣平助の六女に生まれた著者・杉本鉞子の半生が綴られている。平助は戊辰戦争時、恭順派の旗頭として、九歳年長の主戦派河井継之助と対立した人物である。

幕末の英傑として河井を一躍有名にした『峠』の作者・司馬遼太郎さんと『武士の娘』との出会いは昭和四十年。『峠』の取材で長岡に訪れたときのこと。司馬さんは自伝の見事さと文学的感動を雑誌『文藝』に書き留めている。

敗戦後、平助による官軍への主家助命嘆願で、家名存続と二万四千石の再興、長岡城地預かりが許されながら、藩は平助の功を認めず、出奔を理由に裏切り者の烙印を押す。

没落した武家に生まれ、結婚のため渡米した鉞子は、第二次世界大戦の敗戦により、自身が日米の架け橋になろうとすることで、奇しくも父と似た境遇を経験する。

鉞子はどんな思いでペンを執ったのだろうか。

杉本 鉞子（すぎもと えつこ　1872〜1950）
作家。コロンビア大学初の日本人講師。大正末期、英語で綴られた著書『A Daughter of the Samurai（武士の娘）』を出版し、アメリカでベストセラーとなる。その著は8か国語に翻訳され日本の武士の伝統的な暮らしぶりが紹介された。

天下に比類なき銘菓なり

越乃雪

日本三銘菓の誉れ高き、長岡・大和屋の『越乃雪』。材料はもち米の粉（寒晒し）と和三盆をまぜ固めて作る。シンプルがゆえに一途に拘る上質で厳選された素材と職人技から生まれる伝統の味。口どけが良く、ほろっと崩れるさまは粉雪のよう。

幕末の志士・長州藩の高杉晋作は臨終の十日程前、今年の雪見はできないからと、見舞品の『越乃雪』を松の盆栽にふりかけて雪見をしたという。

越乃雪本舗 大和屋　長岡市柳原町3-3
TEL.0258-35-3533

洒脱な晋作らしい逸話である。

この菓子は安永七年（一七七八）、長岡藩九代藩主牧野忠精が初の参勤交代の際に大和屋が献上したのがはじまりという。食が進み、元気になったことを喜んだ忠精は『越乃雪』と名づけ、藩の名産とすることを奨励した。

その後、藩主や藩士の参勤交代の贈答品として盛んに求められ、江戸や上方、蝦夷地にまで広く知られ、町方や在方の冠婚葬祭にも使われるようになった。小林虎三郎も師佐久間象山に贈ったことが書簡に残されている。

『峠』の登場人物たちも、味わったに違いない。

ROOTS 400 越後長岡
長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう
平成30年は長岡開府400年
越後長岡ROOTS400 第5号　司馬遼太郎さんの『峠』

発行／長岡開府 400 年記念事業実行委員会　平成 29 年 7 月 1 日
平成 30 年 2 月 1 日　第2刷
編集／越後長岡ROOTS400編集会議　代表 稲川明雄
石丸千也、恩田富太、 星貴、 渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10（開府400年記念事業推進室内）
Tel.0258-39-2395　Fax.0258-39-2272
E-mail：kaifu400@city.nagaoka.lg.jp
制作／株式会社ネオス
協力／司馬遼太郎記念館、只見町、長岡市立中央図書館、
長岡市立中央図書館文書資料室、長岡市立科学博物館
©